
教材選択とその学習効果

佐藤 敏子

要約

本稿の目的は「文法の指導内容と指導方法」、「オーラル・パセプションテスト」、「シャドーイング」、「使用教科書」が学習者の英語力伸長にどのような影響があるのか明らかにしようとするものである。調査・実験の結果は以下の通りである。

1. 基本文法項目の練習は学習者の文法力向上には直接結びつかず、指導法の検討が必要である。
2. オーラル・パセプションテストは「聞く力」の伸長に効果的である。
3. シャドーイングという練習方法は「読解力」向上に効果的である。
4. 使用した教科書は学習者にとってレベル・内容共に満足いくものであった。

キーワード：オーラル・パセプション、文法、指導方法、シャドーイング、シラバス

1. 始めに

平成23年4月から小学校5年・6年で「外国語活動」という英語学習が開始（「小学校学習指導要領」平成20年3月公示）した。この活動の目標の中には「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」があり、中学校学習指導要領（平成20年3月公示、平成24年度より全面实施）の目標にも高等学校学習指導要領（平成21年3月公示）にもこの文言が入っている。日本の英語学習の究極的な目標はこの「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」にあるといってもいいであろう。小学校・中学校・高等学校で行われている授業はこの目標にあった授業展開がなされ、学習者はその能力を身につけて大学に入学し、その基礎の上に大学教育における「英語教育」がある。

Canale (1983) によると、コミュニケーション能力を支える能力には以下の4つの下位能力があると言われている。

- ①文法能力
- ②社会言語学的能力
- ③談話的能力
- ④方略的能力

この下位能力を学習者にどのような指導法や教材を使って付けるか、ということが小学校から始

まり大学までの英語教育全てに期待された内容である。今回の調査・実験は学習者の文法能力（語彙・文法）を伸長させるためにはどのような教材・指導法が効果的か、さらにその力の伸長は英語のその他の力（聞く力・読む力）にどのような影響を及ぼすかを明らかにすることである。

2. 調査協力者のプロフィール

今回調査対象にした協力学習者（20名）のプロフィールは以下である。

- ① 関東地方の4年制大学1年生。
- ② 英語の専攻ではない。
- ③ 入学時の英語プレースメントテストによるクラス分けでは上位クラスに配属し、英語の能力テスト結果は以下のようになっている。

英検準2級 以上 1名

英検3級 6名

英検4級 13名

この英語力から判断して、以下のような協力者であると言える。

(ア) 調査協力者のうち13名は中学校の英語学習内容を理解しないで大学に入学をしていることになる。

(イ) 高校課程内容を修了しているのは1名だけである。

このため適切な教材選択が必要で、特に指導法は綿密に計画を立て、さらに細かい段階を設定しないと学習効果は期待できない、と判断できる。小学校・中学校・高等学校の「学習目標」に到達するにはかなりの道のりがある。

今回以上のような状況を踏まえて、次のような仮説のもと、調査・実験を開始した。

3. 仮説の設定

- ① Aural Perception Test はリスニング力の伸長に効果がある。
- ② 文法項目の学習定着は読解力伸長に効果がある。
- ③ 指導法 shadowing はリスニング力の伸長に効果がある。
- ④ 使用した既成の教科書のレベル設定は学習者の学力に合っている。

4. 調査内容

(1) 総合的英語学力調査

使用テスト：英語能力判断テスト（英検Cレベル）

プレテスト実施：2011年4月20日

ポストテスト実施：2011年8月11日

(2) 文法力調査

New Horizon English Course 1-2 (中学校検定教科書・東京書籍) より文法項目を56文型を「並べ変え問題」とし、プレテスト (4月25日) とポストテスト (8月4日) を実施した。

授業の中では毎回7文を選び、「英作文テスト」の形式で復習テストを実施し、完全に解答できない学習者に対しては「昼休み」「放課後」を使って再試験を繰り返した。

(3) Aural Perception Test

「TDK 楽しい英語教材シリーズ 中学英語 英語ヒアリングトレーニングCD入門編」(監修 土屋澄男) を使用した。この教材は筆者も作成に加わった。これは筑波大学附属中学校の実践を踏まえ、作成されたもので、minimal pair を用いて1950年代の構造主義的言語学に基づく The Oral Approach の指導法によるものである。この対立音素を区別できることが英語の聴解力やコミュニケーション能力の育成に直接結びつくものでないことは明らかであるが、英語の音のシステムを理解・獲得するためにはこのような組織的な指導・訓練が必要であると考えた。今回プレテスト (4月28日) ・ポストテスト (8月4日) を実施し、授業の中では20回分 minimal pair の発音練習・聞き取りテストを繰り返した。

(4) 学習に対する取り組み意識と学習効果意識調査

以下のような設問肢について学習者に答えてもらった。(2011年8月15日授業最終日実施)

1. この半年間に英語学習に関して、心がけていたことを書きなさい。
2. 教材について、特に「効果」について聞きます。
4 : 大変効果的であった 3 : 効果的であった
2 : あまり効果的ではなかった 1 : 全く効果的ではなかった

(1) Aural Perception Test

(2) 文法テスト

(3) 教科書

(4) Shadowing の取り組み

3. 教材についての総合的な感想を書きなさい。

5. 調査結果

(1) 総合的英語学力調査

- ① 総合結果 プレテスト平均 338.84 ポストテスト平均 357.695
p=0.002<0.01

[分野別結果]

① 語彙・熟語・文法

プレテスト平均 70.52 ポストテスト平均 66.15

② 文章構成

プレテスト平均 23.16 ポストテスト平均 23.16

③ 読解

プレテスト平均 56.13 ポストテスト平均 68.08

$p=0.007<0.01$

④ リスニング

プレテスト平均 59.65 ポストテスト平均 68.77

$p=0.002<0.01$

(2) 文法力調査 (56点満点)

プレテスト平均 45.84 ポストテスト平均 54.21

$p=0.000002<0.01$

(3) Aural Perception Test (50点満点)

プレテスト平均 36.74 ポストテスト平均 40.79

$p=0.007<0.01$

(4) 学習に対する取り組み意識と学習効果意識調査

調査協力者の自由記述は以下の通りである。

1. この半年間に英語学習に関して、心がけていたことを書きなさい。

- ・単語とシャドウイングをしっかりとやる。
- ・英語を聞き取れるように、英文を読めるように、単語を正しい発音で言えるように心がけました。
- ・予習・復習をしっかりとやる。
- ・リスニングではよく聞いて、10点を目標にしていた。なるべく予習をするようにしていた。
- ・プリントをなくさないこと。
- ・出来るだけ出席してまじめにしようとしたが無駄が多かった。
- ・英語は高校時代にサボってしまっていたので、まじめに取り組み、可能な限り英文を読んでおくことを心がけた。
- ・予習をするように心がけました。
- ・文法テストで再テストにならないようにたくさん英文を書いて練習しました。また shadowing が出来るように、英文を何度も読みました。
- ・特に発音がとても悪いので、集中的に頑張りました。私の中では初めに比べてよくなったと思

います。でもまだまだがんばりたいです。ネイティブらしい英文の読み方を目指したいです。

- ・提出物・期限をきちんと守ること。今までやらなかったシャドウイングを頑張った。
- ・基礎をしっかりとやること。
- ・アクセントに気をつけたりした。文法をおぼえようとした。
- ・発音をもっとキレイにしようと心がけた。
- ・英語のテストでなるべく高得点を取り上位にいたいと思っていた。
- ・休まないこと。授業をまじめに1回, 1回, 行う。佐藤先生の話をちゃんと聞く。
- ・基礎的な文法から応用的な文法まできちんと理解を深められるよう心がけた。
- ・基礎を甘く見ずにしっかりとやる。
- ・苦手な文法を気をつけながら学習した。
- ・わからないままにできなかった。

2. 教材について、特に「効果」について聞きます。

4 : 大変効果的であった 3 : 効果的であった
2 : あまり効果的ではなかった 1 : 全く効果的ではなかった

① Aural Perception Test	平均値	3.63
② 文法テスト		3.79
③ 教科書		3.26
④ Shadowing の取り組み		3.53

3. 教材についての総合的な感想を書きなさい。

- ・ shadowing は嫌だけどやれば身につくと思った
- ・ 正しく英語を発音するのは初めてと同じ状態で、どれもなれるのに大変でしたが shadowing や教科書を使った授業で少しずつなれるようになってきて、良い勉強になりました。
- ・ 難しいのもあったけれど、自分の力になった、と思います。
- ・ 最初は簡単だと思っていたけど思ったより難しかった。
- ・ shadowing が難しい。
- ・ 教科書は内容がとてもわかりやすかった。文法や発音テストは自分の英語力を鍛えるのにとっても有効で、全体的に見て非常に良かった。
- ・ とても良かったです。
- ・ pre テストの出来なかったところを出来るようにするための毎回の英文テスト良かったです。
- ・ 発音の練習がとてもわかりやすく勉強になりました。shadowing も大変だったけど、高校で出来なかった分できて、本当に良かったと思います。
- ・ 今まで発音は苦手で、あまりやらなかったけれど、授業に入ってたので、やる機会を持てて良かったです。
- ・ shadowing が大変だったが、とても勉強になった。
- ・ 文法テストなどは、再テストばかりだったけれど、実際に自分の成績がのびていたのすごく良かった。

- ・英語の発音のやり方とかも先生に教わりながら、教材の英文を発音できたのでけっこう上達したと思う。
- ・とてもおもしろく英語を学べました。このまま TOEIC にも挑戦してみたいです。
- ・基礎からみっちりと学べる教材だった。英語離れをしている自分には良かった。
- ・今までやったことのなかった学習法で新鮮だった。
- ・APT を通してリスニングの力が大幅に上がったと思う。
- ・大学生らしい高校とは違った授業だった。

(5) 結果の考察

今回の総合テストの結果から考察すると、次のことが結論として言える。

- ①総合的な英語力はこの授業を受けることによって伸長した。(p=0.002<0.01)
- ②語彙・熟語・文法分野と文章構成力は全く伸びは見られない。語彙などの分野はむしろ低下した。
- ③読解力の伸長は見られた。(p=0.007<0.01)
- ④リスニング力の伸長は明らかになった。(p=0.002<0.01)
- ⑤使用した教科書はレベル・内容に関して学習者が満足するものであった。

となり、教材選択と授業展開について以下のことが言える。

総合的な英語力の伸びに効果があり、読解力およびリスニング力の伸長に効果がある教材と授業展開である。

しかし今回の調査・実験では問題点も明らかになった。以下、その点について論じる。

6. 問題点

文法項目テストのプレ・ポストを実施し、定着のために小テストを授業の中で行ったが、このテストだけで考えると $p = 0.000002 < 0.01$ となり、「定着は達成された」と言えるが、総合テストの「語彙・熟語・文法」力と「文章構成」力にはプラスの影響を与えてはいない。この総合テストでは受験生の文法運用力は「文章構成」の分野で測定できると考えると、今回の授業設計では学習者の文法運用力は伸びていない、という結論が出る。

文法項目テストで「共通項目」として取り上げた内容は中学1年から2年までの内容で、筆者の担当したクラスではさらに「中学3年生の内容・関係代名詞」を加えた。しかしそれでもならず、今後中学校学習指導要領で学習する内容をすべて網羅し、高校の内容も1部加えないと、文章構成力の伸長は期待できない、という結果が出た。さらに文法の定着はそのルールを理解するだけでは不十分で、「文法事項の機能を確認しながら、形式的な操作力を高めることが出来るコンテキスト化されたドリルを行って言語知識の自動化を促し、コミュニケーション活動の足固めが必要である」(村野井 2011) としている。

また、コミュニケーション・アプローチでも文法能力の伸長に関しては指導法が明らかにされていないが、Learning by Doing という考え方で意味機能中心のコミュニケーション活動の過程で習得さ

れると考えられている。

言語活動は「文法力」と「語彙力」が支えるが、今回この2つの事項において総合テストで伸びが見られなかったことは今後の大きな課題として残る。今年度シラバスを作成するときに、特に授業展開の中で以下に述べる活動を組み込むことを計画した。

この活動はインタラクションを通して「習得」を試みる活動として位置づけた。特に教員が学生に対して話しかけ (initiation), 学生がそれに反応し (responding), さらに教員が応える (feedback) という IRF と呼ばれる手順を踏む。

教科書の例文：I like to sing at parties.

Teacher: Tell me your opinion about this sentence.

Student A: I agree with this opinion. I like singing very much. I enjoy singing with my friends.

Teacher: Oh I see. You like singing, don't you? What is your favorite song?

Student A: ()

Teacher: How about you, B?

Student B: I disagree with this opinion. I am not good at singing.

このような活動、特に継続的な活動は「文法項目」の定着に効果的であるのはすでに英語教育指導法の分野では定説となっているが、今回その効果がポストテストの「文章構成」という「文法力」を判定する分野で伸長がみられなかった原因を、今後明らかにしなければならない。今言えることは、今回の活動が「文法項目の定着」を図るための活動ではなく、言い換えれば、村野井の言う「形式的な操作力を高める（ことが出来るコンテキスト化された）ドリル」とはなっていない、と言うことであろう。文法の定着と言語活動が有機的に結びついていない授業展開となってしまっている、という結論は明らかである。

7. Shadowing と読解力

今回使用した教科書は4技能のうち主に Listening/Speaking の力の伸長を目的に編集されたもので、「長めの英文を読む」という活動は設定されていない。使われている英文は対話形式で、その内容は大学生に適したものではあるが、英語のレベルは初歩的なものである。授業中の活動は、この英文の聞き取り、内容チェックの英問英答、さらに音読のあと、Shadowing という指導展開をとり、英語らしいリズムやイントネーションを身につけることを目的とした。またその後上記に述べたような「言語活動」を加えて授業構成とした。今回「総合テスト」で「読解力の伸長」がみられたが、その理由を分析すると Shadowing との関連が考えられる。

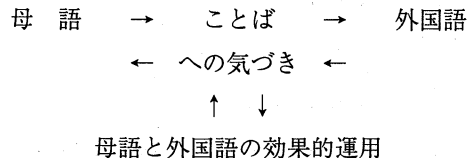
Listening/Speaking 活動の Shadowing がどうして読解力の伸長に結びつくのか、門田・玉井(2005) は明らかにしている。

「リーディングとは目で見えた文字を内的に音声化して、ワーキングメモリの音韻ループ内に格納し、そこで心的音声として保持しつつ、文の語彙・文法・意味・文脈・スキーマ処理を行うプロセ

ス」であり、「その心的音声化とそのリハーサル（内語反復）をシャドーイングで鍛えることが出来る」と説明している。そのことが今回立証された。

8. 今後の大学英語教育

大津（2011）は言語教育の構想として以下のような図を提案している。



特に母語を利用して文法概念への気づきを重要視し、その後の外国語学習を効果的に導くことを指摘している。今回の学習者の多くが中学校・高等学校の6年間の英語学習にもかかわらず「中学校卒業レベル」以下の英語力を考慮すると、「母語を利用して形成されたことばへの気づき」の不足が推測される。英語教育の効果的な展開のためには、学習者の「日本語能力」の調査結果が必要で、その結果を踏まえ、英語の文法力向上のためのカリキュラム作りが必要だと思われる。

しかし、文法指導がこのような「明示的な指導」で全て解決出来るとは限らない。特に6年間の英語教育を受けているにもかかわらず、多くの学習者が年月に見合う学習定着が見られない場合には効果的ではないという実験結果も報告されている。白畑（2011）は「日英語の対照分析的説明をとおし、両言語の相違を明示的に教える方法を採用するとその効果は学習者の習熟度によって異なる」という結果を紹介している。特に「習熟度の低い大学生には効果的ではない」という。今回のような調査協力者を対象にした授業ではもっと細かい指導計画が必要とされる。白畑は項目別に指導形態を変えることを提案している。

- ・明示的に文法説明をした方が良い項目

主語、冠詞、複数形、現在完了形、属格、仮定法、分詞の後置修飾

- ・タスクによって定着がはかれる項目

代名詞の変化、語順、比較表現、三単現、動詞過去形、関係代名詞、現在進行形、wh 疑問詞、時制

このことから、今後の授業計画を考えると以下の3点を明らかにし、教材選択をしなければならない。

- ①プレイズメントテストによる学習者の英語学力判定
- ②授業履修者の日本語学力の判定
- ③文法項目の指導範囲と指導方法の決定

このことにより、今回文法指導が学習者の文法能力の向上に結びつかなかった問題点の解決に向かうと思われる。

（さとう・としこ メディア社会学科）

参考文献

- Canale, M. (1983) "From Communicative Competence to Communicative Language Pedagogy." *Language and Communication*. Longman.
- Fuller, D. / Kiggell, T. (2010) *Advantage: Get going! Second Edition*. Macmillan Languagehouse.
- 門田修平・玉井健 (2005) 『決定版 英語シャドーイング』コスモピア
- 文部科学省 「小学校学習指導要領 外国語活動」
「中学校・高等学校学習指導要領—外国語（英語）」
- 村野井 仁 (2011) 「新学指導要領における文法指導」『英語教育』10月号 大修館書店
- 大津由紀雄 (2011) 「母語の知識と外国語教育」『第2言語習得』大修館書店
- 白畑知彦 (2011) 「文法項目別・習熟度別指導法の提案」『英語教育』10月号 大修館書店
- 佐藤敏子・中川武・山名豊美 (2010) 「なぜ学習効果があがらないのか—学習動機・学習方法と学習効果—」『つくば国際大学研究紀要』16号
- 佐藤敏子・中川武・山名豊美 (2011) 「リメディアル教育の実践—教材選択とその効果の検証—」『つくば国際大学研究紀要』17号

Selection of Teaching Materials and methods and Their Effectiveness

Toshiko Sato

The purpose of this study is to clarify how the teaching materials and methods are effective in acquisition of a good educational foundation for English.

Materials and method we used are; Aural Perception Test (Minimal Pairs), Grammar Test (targeting at sentences of junior high school level, and Shadowing.

1. The research says “Grammar Test” is not useful for the students, and it is necessary to conduct a further examination of teaching method in order to make students acquire grammatical competence.
2. “Aural Perception Test” works positively for activating the students’ listening comprehension skill.
3. “Shadowing” is effective for developing reading comprehension skill.
4. The selection of the textbook gratified the students both on the level and the content.

[keywords] aural perception, grammar, teaching method, shadowing, syllabus